



能忍寺たより



Vol.47

行事紹介

○十三夜(じゅうさんや)

十三夜(じゅうさんや)は、旧暦九月十三日の夜を指し、古くから日本で親しまれてきたお月見の習わしです。九月の「十五夜」が中国から伝わったのに対し、十三夜は日本独自の風習とされており、十五夜に次いで美しい月と称えられてきました。十五夜と十三夜のどちらか一方しか観ないことは「片月見」と呼ばれ、縁起が悪いとされるほど、セツトで大切にされてきた行事です。

仏教的な視点では、この時期は収穫の喜びを仏様やご先祖様に報告し、感謝を捧げる「報恩」の季節にあたります。供え物として栗や豆が用いられることから、別名「栗名月」や「豆名月」とも呼ばれます。お寺によつては、秋の夜長に観月会が催され、月明かりの下で読経や法話が行われることもあります。

十五夜が満月を目指して満ちゆく「祈り」の象徴であるならば、少し欠けた状態の十三夜は、不完全なものの中に風情を見出す日本特有の美意識を映し出しています。秋の澄み渡る夜空に浮かぶ月を見上げながら、自然の恵みに感謝し、静かに手を合わせるひときは、忙しい現代人の心に安らぎと豊かさを与えてくれることでしょう。

今月のことば

○色即是空(しきそくぜくう)

「色即是空(しきそくぜくう)」とは、般若心経の核心をなす言葉で、「この世の形あるもの(色)は、すべて実体がない(空)である」という仏教の根本的な真理を説いています。

ここでいう「色」とは、私たちの目に見える物質や肉体、現象すべてを指します。一方の「空」とは、単に「何もない」ということではなく、あらゆるものは互いに関わり合つて存在しており(縁起)、固定された不変の正体などどこにもないという状態を意味します。

つまり、私たちが「これは自分のものだ」「これは永遠だ」としがみついている対象も、実は絶えず変化し続ける一時的な姿に過ぎません。この「色即是空」の智慧を理解することで、物事への過度な執着から解放され、ありのままの世界を穏やかに受け入れる自由な心が養われるのです。

コラム あれもこれも仏教用語

○出世(しゅっせ)

「出世(しゅっせ)」という言葉は、現代では社会的な成功や昇進を意味しますが、もとは仏教において「世間を出る」「つまり出家して悟りの世界へ向かうこと」を指す言葉でした。

本来は、迷いや欲望に満ちたこの世(世俗)を離れ、仏道を歩み始めるといふ崇高な決意を表していました。また、仏様が人々を救うためにこの世に現れることを「出世間(しゅっせけん)」と呼んだことも語源の一つです。

時代が下るにつれ、寺院内での階級が上がることを指すようになり、そこから転じて現在の「社会で高い地位を得る」という意味へと変化しました。自分を磨き、高い境地を目指すという点では、現代の成功もかつての修行も、通じるものがあるのかもしれない。

心の持ちよう

○長い簀のお話

「地獄と極楽の長い簀」というお話は、環境が同じであつても、私たちの心の持ちよう一つでその場所が天国にも地獄にもなることを教えてくれます。

物語の舞台は、地獄と極楽のそれぞれにある食堂です。どちらの場所にも、目の前には豪華で美味しそうな料理が山ほど並んでいます。そして、そこにいる人々が手にしているのは、一メートル以上もある非常に長い簀です。地獄にいる人々は、空腹に耐えかねて、我先にとご馳走を口に運ぼうとします。しかし、簀があまりに長すぎるため、どれだけ腕を伸ばしても料理を自分の口に入れることができません。焦りと飢えから他人を突き飛ばし、互いに料理を奪い合いますが、結局誰も食べることができず、怒りと悲しみの中で争い続けています。

一方で、極楽にいる人々の光景は全く異なります。彼らも同じ長い簀を持っていますが、その顔には穏やかな微笑みが浮かんでいます。彼らは長い簀を使い、向かい側に座っている人に対して「どうぞ、まずはあなたから召し上がってください」と、料理を優しく口に運んであげるのである。すると、食べさせてもらった人も「次はあなたの番ですよ」と、お返しに料理を食べさせてくれます。

このように、場所や道具という条件は全く同じでも、「自分さえ良ければいい」という自利の心か、「相手を幸せにしたい」という利他の心かによつて、結果は正反対になります。幸せとはどこか遠くのものなく、私たちの「心の持ちよう」の中にこそ存在しているのです。